

# 『一乗院経蔵記』にみる坊津一乗院と中世文芸

——地域社会における文芸環境——

鈴木 彰

## 一 十六世紀の坊津・一乗院

坊津（現鹿児島県南さつま市）は薩摩半島の南西端に位置し、東シナ海に面した港町である。かつてここには一乗院という真言寺院が存在した（廃仏毀釈で廃寺）。延宝元年（一六七三）十二月の跋文をもつ『一乗院来由記』（卷子一卷。南さつま市坊津歴史資料センター輝津館蔵）では、百済僧日羅が来朝して聖徳太子と会ったのち、この地へ来たって坊舎仏閣を造営したことが濫觴とされているが、その実態は定かではなく、近世につながる歴史は、同書が「中興」とする延文二年（一三五七）以降のことと考えられている<sup>1)</sup>。

中世港湾としての坊津は、十五世紀以降、島津氏の強い影響下に入る。そして、港として最も繁栄した十六世紀中期頃には相州家（島津本宗家となる）の支配下にあった。とくに、天文八年（一五三九）以降、坊津の北に位置する加世田に拠を構えた忠良（日新斎）との関係は重要とされ、忠良の子貴久、その子義久、義久

の弟義弘の子で初代薩摩藩主となった家久へと続く島津本宗家との緊密な関係は、『一乗院来由記』でも強調されている。

坊津の貿易港としての機能や歴史の変遷については、なお議論が続いている<sup>3)</sup>。ただし、十六世紀の坊津が、島津家との関係にも支えられながら、対外貿易の重要拠点であったという点に異論はない。中国側でも坊津を博多津・安濃津と並ぶ日本の「三津」のひとつとしており（『武備志』。一六二二年成立）、坊津や一乗院周辺から中世後期から近世初頭にかけての遺物として、中国産陶磁器やベトナム産陶器が数多く発見されているのである。ただし、坊津が東アジア海域における貿易拠点として大きな役割を担ったのは、近世の初頭頃までであった。島津本宗家の支配が薩摩半島全域に及ぶようになり、藩の政策として鹿児島湾の出入口に位置する山川港（現指宿市）が琉球貿易の拠点とされると、坊津の地位は相対的に低下していったと考えられている。

他方、一乗院聖教類の調査が進むにつれ、九州から畿内、尾張、関東におよぶ広範な地域を往来する人と物（とくに聖教・典籍類）の交流、とくに真言宗寺院・談義所のネットワークが掘り起こさ

れつつある<sup>④</sup>。一乘院自体を「諸方からの僧が集まる談義所」とみる見解もあり<sup>⑤</sup>、また日本・薩摩から琉球へと続く修験者・密教僧のネットワークを構成する拠点のひとつとする指摘もなされている<sup>⑥</sup>。

以上のような理解を踏まえ、本稿では、海域交流の拠点、真言密教の道場（談義所）とされる坊津一乘院がもっていた、種々の文芸を享受し、地域社会へと発信していた場としての側面に光を当ててみたい。中世の文芸環境は、都・中央から諸地域社会への文芸・文化の伝播と受容、それぞれの地域色を帯びた再編・再生、そして諸地域から都・中央への環流のさまを視野に収め、多極的かつ大局的に把握すべきものである<sup>⑦</sup>。そのため注目すべき事例研究のひとつとして、坊津一乘院という文芸環境の分析に取り組んでいく。

## 二 『一乘院経蔵記』の意義

『一乘院経蔵記』（東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」以下、『経蔵記』と略称）はじつに示唆的な目録である。柿色の表紙をもつ、全九丁からなる袋綴じの一冊本で、外題に「一乘院経蔵記全」とある。扉中央に「一乘院経蔵聖教内拔書之」、その右に「山号／如意珠山」、左に「勅号／西海金剛峯寺」と朱書され、「写間敷也」「四十四」の貼り紙が付されている。奥書は「寛永十一年<sup>甲戌</sup>八月大吉日」とある。その内容は、寛永十一年（一六三四）八月当時、一乘院経蔵内にあった「聖教」から抜粋した聖教・典籍・宝物類の目録とみてよい。詳しい制作事情は不明だが、十八世紀

半ば（延享年間）の一乘院住職（第二十六代）快宝がまとめた「当山宝物案内記 上下」（以下、「宝物案内記」と略称）の「水精自然石御舍利」にかんする記事に、「寛永十一年<sup>甲戌</sup>秋、邦君家久公請<sup>レ</sup>之為護持御本尊<sup>ニ</sup>也」とある。この「自然石御舍利」は『経蔵記』にも記されており、かつこの一件と掲『経蔵記』奥書とは時期が合致している（寛永十一年秋）。『経蔵記』が「島津家文書」として伝来していることからみて、薩摩藩・島津家の要請で一乘院側が作成し、提出されたものであった可能性が高いわけだが、右の「宝物案内記」の記事を併せみると、初代藩主島津家久の命が下されたことがうかがえよう。ちなみに、まさにこの寛永期以降、薩摩藩・島津家は幕藩体制の整備に伴って、藤原姓から源姓へとその由緒を更新していった<sup>⑧</sup>。こうした状況を勘案すれば、『経蔵記』は、藩主や藩士たちの家譜や寺社の由緒等を含めた島津家領国の歴史を近世的なかたちへと再編していく動向に応じる形で、いいかえれば、そうした広義の修史事業に用いることを想定して、薩摩藩が公的に作成させたものなのではなかろうか。もちろん、それは藩政を支える制度面の整備とも連動していたはずである。

次に、その内容を見渡すために記事全体を引用しておこう。

### 目録

一 日本記私	上 下
一本願業師経	一 卷
一 夢中問答	三 卷
一 天照大神口決	一 卷
一 世鏡抄	三 卷

一 祓聞書	一卷	┌ 1才	一 大師行狀記	十卷
一 法華經	七卷 <sub>唐</sub>		一 父母恩重經	一卷
一 老子經	一卷		一 諸宿曜圖	一卷
一 鵜戸縁起	一卷		一 般若心經七品	一卷
一 御請來録	一卷		一 月盡長者	一卷
一 諸社事	一卷		一 十住心論	十卷
一 心月輪秘釈	一卷	┌ 1ウ	一 一期大要集	一卷
一 五輪九字	一卷		一 日月輪秘観	一卷
一 八幡大菩薩事	一卷		一 流來生死事	一卷
一 釈迦八相論	上下		一 浄土大綱問答	一卷
一 四重秘釈	五卷		一 法華談義品	一部
一 即身成仏經	一卷		一 心地観經	八卷 <sub>裏書有</sub>
一 繪観音經	一卷		一 真俗万集記	一卷
一 阿字秘釈	二卷	┌ 2才	一 神代卷	二卷
一 三国伝來記	二通		一 法然上人縁起	一卷
一 元亨尺鈔	十五卷		一 同略行狀	一卷
一 太子伝	七卷		一 破日連記	一卷
一 孝養集	上下		一 山水抄	上中下
一 職原集	上下		一 古吟和歌秘注	三卷
一 大唐長曆	一卷		一 江湖風月集	四卷
一 正八幡縁起	一卷		一 父祖相迎	上下一卷
一 治世記同注	二卷	┌ 2ウ	一 朗詠私	三卷
一 法華直談抄	十卷		一 久寿物語	一卷
一 千手陀羅尼經	一卷		一 婦命本願抄	一卷
一 心安集	上下 <sub>唐</sub>		一 月清抄	二卷
				┌ 4ウ
				┌ 4才
				┌ 3ウ
				┌ 3才

一古今秘抄	一卷		一兜拔毘沙門	一幅	
一万葉集	一卷		一阿字 <small>御筆</small>	一幅	
一歌書	一卷		一六字名号 <small>御筆</small>	一幅	
一百詠	上下二卷		一訶利帝母	一幅	
一古今序	一卷		一大勝金剛	一幅	
一老吟	一卷		一天神 <small>御自筆</small>	一幅	
一愚門賢	一卷	┌ 5才	一涅槃像	一幅	
一善隣国宝記	一卷		一当麻曼荼羅 <small>タエマ</small>	一幅	
一愚秘抄	一卷		一御震筆ノ額	一幅	
一生死本源經	一卷		一御震筆ノ短冊	一幅	
一平家物語	一卷		一大師行狀記	十幅	
一般若心經私	一卷		已上本尊分		
一錫杖私	一卷				
一法花經廿八品大意	二通	┌ 5ウ	一金色ノ如意輪觀音	一体	
一円頓者聞書	一卷		一中將姫ノ法華經	一部一卷	
一聖憲阿字觀私	一卷		一御作土仏ノ五輪 <small>カネ</small>		
已上書物分			一金ノ舍利殿 <small>一粒有</small>		
一千手觀音	一幅 <small>唐</small>		一釈迦ノ御齒		
一縫阿弥陀	一幅 <small>中尊姫</small>		一自然石ノ御舍利		
一摩利支天	二幅		一円室様ノ心經 <small>御自筆</small>		
一独古阿弥陀	一幅	┌ 6才	一御筆心經		
六才 一名字名号 <small>御筆但朴</small>	一幅		一般若心經 <small>智證大師御筆</small>		
一文殊 <small>天神御筆</small>	一幅		一十地論 <small>御筆</small>		
一乙護法	一幅		一尊勝陀羅尼 <small>御筆</small>		
一七仏種字 <small>御作</small>	一幅		一光明皇后 <small>御筆ニツ</small>		
					┌ 8才

一 御筆經 一紙

一天神御言草

一 近衛殿御筆三

一 水精舍利塔

一金毘沙門

一 土仏地藏御作

一 双身毘沙門

一 弘法大師法印号

一 劍

一 刀御筆

一 篤盛笛ノギキ

一 弘法大師御衣

寛永十一年戊甲八月大吉日

冒頭から「已上書物分」とあるところまでに典籍類、そこから

「已上本尊分」までに掛幅類、続けてそれら以外の寺宝類が列挙されている。これらは「一乗院経蔵聖教内」から「拔書」したものであるから、実際には、さらに多くの品々が一乗院経蔵に収められていたはずである。残念ながら、その全貌や「拔書」の選抜基準は不明だが、寛永十一年当時、一乗院経蔵がじつに多種多様な典籍・道具類を収蔵していたことはうかがえる。これらは、中世以来の一乗院の活動実態に応じて諸方から漸次集積されたものと考えられる。

その内容が、文芸・宗教・有職故実・外交等にかかわるさまざまな文物の伝播、享受、再生の様相を伝える貴重な記録であるこ

とは明らかである。ただし、この目録に投影されている一乗院が培ってきた文化・文芸環境としての実態については、従来ほとんど顧みられていない。<sup>9)</sup>したがって、「経蔵記」の分析は、必然的に真言寺院としての一乗院が地域社会のなかでいかなる場であったのかを問い直すことにつながるであろう。今後、「経蔵記」の記事をていねいに吟味し、各項目の意義を多角的に読み解くことが求められる。

### 三 一乗院をとりまく文芸環境

右のような課題を見定めたくうえで、本稿では、「一乗院経蔵記」のなかから一乗院をとりまく文芸環境を示唆するいくつかの特徴的記事を指摘し、さらなる分析の糸口としたい。

まず注目されるのは、種々の歌集・歌論・注釈書・漢詩文集の存在である。一乗院はこれらを受容し、利用する場でもあった。十六世紀の島津家歴代家督や家老たちは武家文化人としての顔をもち、都の貴顕とのかかわりのなかで和歌・漢詩文を嗜んでいた。<sup>10)</sup>先に、『経蔵記』制作に初代藩主家久が関与していた可能性を指摘したが、彼のもとにも慶長五年段階で多くの歌書類が所蔵されていたことを確認できる。<sup>11)</sup>一乗院における和歌・漢詩文関係書の利用実態は今後の課題となるが、中世以来続く一乗院と島津家との緊密な関係史がここに反映していることは想定しておいてよいだろう。

信仰にかかわる唱導・文芸の一環としては、まず法華経直談にかかわる典籍が伝来していたことが興味深い。「法華直談抄 十卷」

「法華談義品 一部」など、大部な著作もみえ、法華経直談にかかわる学問の場が一乗院に存在したことをうかがわせる。当然、その背後には、他地域との談義所等と結ばれた、直談にかかわる人と文物の交流・流通網の存在を想定できる。

一乗院では、涅槃会に際して涅槃図が掛けられていた。十六世紀末に坊津に配流された近衛信輔（のちに改名して信尹）は、その様子を自らの日記に「一乗院晚振廻、風呂アリ、涅槃被懸」と記し、当日一乗院で詠んだ「俳諧発句」を書き添えている（『三藐院記』文禄四年（一五九五）二月十二日条）。また、翌日条に「一乗院式まゝる寺開」とあるのも、わずかではあるが一乗院での関連法会のさまを伝えていて貴重である。このとき信輔が目の当たりにした涅槃図とは特定しがたいが、『経蔵記』には「涅槃像一幅」とある。なお、一乗院旧蔵の涅槃図として、今日、鎌倉期の「絹本着色八相涅槃変相図」（龍巖寺蔵。輝津館保管）や、室町期の「絹本着色涅槃図」（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）が現存する。これらを見渡してみると、十六世紀の一乗院では複数の涅槃図を所蔵しており、『経蔵記』にみえる「釈迦八相論上下」「三國伝來記 二通」「月蓋長者 一卷」も含めて、釈迦の伝記（仏伝）にかんする知識と関心が蓄積されていたようだ。そうした知識は、たとえば涅槃図の絵解きに際して披露されることもあっただろう。加えて、対外交易の拠点として、海とともに生きる坊津在住の人々の間では、眼前に広がる海の彼方に天竺を想う独特な感性が培われてもいたらしい<sup>14</sup>。その地理的条件ともあいまって、仏伝語りの場としての一乗院は、東アジアに広がる（仏伝文学<sup>15</sup>）の交流圏における注目すべき要所といえるだろう。

なお、この点ともかわるが、『経蔵記』に「善隣国宝記 一卷」のような外交手引書や、「法華経 七卷<sup>唐</sup>」「心安集 上下<sup>唐</sup>」のごとき唐本、「御請來録 一卷」「三國伝來記 二通」「大唐長曆 一卷」のような書物がみえることは、おのづから海域の交流拠点としての坊津・一乗院の性格を浮かび上がらせる。十六世紀末から十七世紀初頭にかけて、坊津が衰退期を迎えることは前述したが、それでも近衛信輔は、「及晩唐人五六人來ル、詩を作カ、セテ見物、各明日可罷帰よし也」（『三藐院記』文禄三年五月二十五日条）のように、坊津で「唐人」と親しく接していた。また、その十日前、まだ配流の途（大隅国肝属郡海瀉）にあった信輔のもとに、「法華経高麗」（高麗版）が持ち込まれていること（同十五日条）も、地域的特性を示唆する出来事として併せて視野に入れておきたい。

さて、一乗院には「当麻曼荼羅 一幅」のほか、おそらく中将姫の自作あるいは自筆という由緒を伴うものと推察される「羅阿弥陀 一幅中将姫」や「中将姫/法華経 一部 一卷」が伝えられていた。一乗院は、大和当麻寺ゆかりの中将姫の物語を伝え、発信する場でもあったことがうかがえる。当麻曼荼羅の絵解きが行われたこともあったのではない<sup>16</sup>。

絵解き関連としては、「大師行状図 十幅」にも触れておきたい。これは、近衛信輔が「一乗院ノ風呂二入、アカリテ弘法大師十幅ノ絵ヲ見物ス、驚目」（『三藐院記』文禄三年六月六日条）と記したものにあたる可能性があるだろう。その半月ほど前に坊津に着いた信輔は、「さても心うき所哉」、「推量之外の外なるにか／＼敷ありさま」、「近年殊更衰微せるよしなれハ聞しにかハリ人家も

すくなく、人の往来もまれにして」などと記し、坊津の予想以上に鄙びたさまを深く歎いていた(同五月二十一日条)。そんな都人信輔を「驚目」させたのがこの掛幅であった。「宝物案内記」には「一、弘法大師行状絵 十幅／右遍智院宮筆」とある。中世にさかのぼる、掛幅形式の弘法大師伝絵の例として貴重で、これも然るべき折々に絵解きされていた可能性があるだろう。なお、『経藏記』には「書物」としても「大師行状記 十卷」があげられている。現存する十巻本の作例に照らせば、こちらは絵巻であったかと思われ、十幅の掛幅絵との関係が気にかかるが特定しがたい。ともあれ、これらの伝来過程には、やはり高野山を含めた真言寺院間のネットワークが機能していよう。また、空海の渡海(入唐)場面などを含むその内容は、海域交流の拠点たる坊津ならではの意義を帯びることもあったのだろうか。享受論的な分析の道もさらに模索したい。

また、「文殊天補御筆 一幅」「天神御自筆 一幅」などによって、天神信仰も一乗院に流入していたことが確かめられる。後者は、「宝物案内記」に、

一、網敷天神絵 又云、形見御影 一幅

為「佞臣 讒焉、延喜元年辛酉左遷於筑紫、着岸大宰府」  
砌、從臣等敷網設御座坐之所、自画、為御容見賜  
此從臣云々、

とあるものであろう。同書には、他に「一、関白天神木像／右近衛前関白信輔公於当寺之多宝院彫刻」も掲出されており、天神信仰に傾倒していた近衛信輔の配流に由来するものも少なからず存在したようだ。ただし、すべてを信輔との関係で把握できるわ

けではない。

末尾近くに見える「篤盛笛 二ツ」についても述べておこう。

「篤盛」は、いわゆる一の谷の戦いで熊谷直実に討たれた平敦盛のことである。覚一本『平家物語』によれば、若武者敦盛を泣く泣く討ったのち、直実はその腰に差された錦の袋に入った笛を見つけ、「あないとおし、……上臈は猶もやさしかりけり」と述べると、それを見た者たちに涙の輪が広がったという。「それよりしてこそ熊谷が発心のおもひはず、みけれ」、「狂言綺語のことはりといひながら、遂に讚仏乗の因となるこそ哀なれ」とまとめられるように、この笛は直実を発心へ導いた象徴的な品である。この笛について語る、『平家物語』を下敷きにした後出の物語や伝承でも、その扱いは基本的に共通である。一乗院に「篤盛笛」があるのは、それを用いた説法・語りが行われていたことを意味しよう。そして、先述したような意味の象徴性を帯びた「笛」をもとにした語りである以上、その内容は、敦盛や直実の武勇にではなく、敦盛の死を契機とした直実の発心に焦点をあわせたものであったと考えられる。今日、「敦盛最期」は直実の苦悩の物語として読まれるのが一般的となっているが、じつは中世から近世を経て昭和戦前期に至るまで、当該話は多くの場合、彼らの武勇を語る物語として読まれてきた。したがって、中近世移行期の坊津で発心に焦点をあわせた直実物語が語られていたことは、大いに注目に値する事実といえる。しかも、この笛は「二ツ」あるという。本物を示しながら語るといのが名目であろうから、この状況は、直実の発心話がそれだけ多くの場で求められていたことを意味するのではなからうか。

なお、『経蔵記』によれば、このとき一乗院には「平家物語一卷」が所蔵されていた。多くの『平家物語』は十二巻構成であるから、これは不揃いの断片にほかならず、一乗院の文化的水準の低さと受け止めることもできよう。ただし、全巻揃いの完本を所有していることを自明視してしまつては、地域社会の文芸環境はつかみきれまい。表面的には不揃いな断片ともいえるものたちが、その地域ならではの、いかなる意味や必要性を持っていたかを掘りおこすこと、また、都・中央とそれ以外の諸地域の文芸・文化にかんする状況や価値観のゆらぎとせめぎあいを双方向的に読み解くことが、地域の文芸環境とむきあう際には強く求められる。

一乗院にあつた「平家物語 一卷」は、先の「篤盛笛」とかわる巻九「敦盛最期」や、祇園精舎の鐘の声、沙羅双樹の花の色という、著名な釈迦の事績や涅槃図とかかわる話題を扱う巻第一だったかもしれない。現状ではそれを特定できないのだが、坊津・一乗院という場で必要とされた部分こそが優先的に求められたり、大切に保管されたりしたことだろう。地域ならではの必要性にかんする具体相、いわば〈文芸をめぐる地域の論理〉のさらなる解明を期したい。もちろん、これは、先述した歌書・漢詩文以下、すべての作品・メディアにかんしても個々に追究すべき課題である。

#### 四 おわりに

本稿では、寛永十一年八月にまとめられた『一乗院経蔵記』を

とりあげ、主に十六世紀から十七世紀初頭にかけて、真言寺院たる一乗院で成り立っていた文芸環境の発掘を試みてきた。真言系の「書物」、「本尊」、宝物が伝わっていたのはもちろんだが、じつは一乗院には真言宗以外の諸宗派にかんする書物・品々も伝わっており、またさまざまな文芸にかかわる場が成り立っていたことが浮かび上がってきた。これまで、一乗院については、諸宗兼学という中世の寺院社会の実態を視野に入れつつも、やはり根来寺や高野山などつながらる真言僧侶たちの活動を軸として把握される傾向にあつた。しかし、一乗院とその周辺で生きていた人々が実践していた文芸にかかわる営みは、かならずしも真言色のみではなく、より多面的であつたことを確認しておきたい。本稿では『経蔵記』の意義を粗々述べたのみである。続稿であらためてその内実に踏み込んだ分析を試みたい。

#### 注

- (1) 藤田明良「中世後期の坊津と東アジアの海域交流——」一乗院来由記「所載の海外交流記事を中心に——」(九州史学研究会編『境界からみた内と外 九州史学』創刊五〇周年記念論文集 下) 収 二〇〇八・十二 岩田書院。
- (2) 橋口亘「中世港湾坊津小考」(橋本久和・市村高男編『中世日本の流通と交通』 収 二〇〇四・四 高志書院)。
- (3) 紙幅の関係でそのすべてを示すことはできないが、五味克夫「坊津一乗院跡と一乗院関係史料」(『一乗院跡』坊津町埋蔵文化財報告書一 一九八二) から坊津像再考の動きが始まった。注2橋口論文、栗林文夫「坊津一乗院の成立について



て「黎明館調査研究報告」18 二〇〇五・三)、福島金治「密教聖教の伝授・集積と隔地間交流——「坊津一乗院聖教類等」の検討を通して——」(九州史学) 160 二〇一・十)などでそれぞれの段階における研究史が整理されている。

- (4) 一乗院聖教類のなかから発見された「日本図」をめぐる議論のなかで、とくにこうした側面の検討が飛躍的に進められた。栗林文夫「南さつま市坊津歴史資料センター所蔵の「日本図」について」(鹿児島県・鹿児島県歴史資料センター黎明館編『黎明館企画特別展 祈りのかたち〜中世南九州の仏と神〜』収 二〇〇六・九)、野田泰三「坊津一乗院聖教類等」所収「日本図」について(藤井讓治他編『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』収 二〇〇七・三 京都大学出版会)、注3福島論文等参照。その他、栗林文夫「根来寺と坊津一乗院について」(和歌山地方史研究) 49 二〇〇五・七)は根来寺と一乗院との関係史を追究している。
- (5) 注3福島論文。「坊津一乗院聖教類等」のうち応永二十年「沙弥道通寄進状」に「談義所之内南坊寛本阿闍梨」云々とあるのによる。ただし、この点に慎重な見方もある。

(6) 注1藤田論文。

(7) 鈴木彰「佚文」の生命力と再生する物語——薩摩・島津家の文化環境との関わりから——」(中世文学) 57 二〇一・二・六)などでこうした問題を取りあげてきた。

(8) 寛永三年島津家久宛口宣案までは藤原姓、同七年島津光久宛口宣案からは源姓が使用されている。同十八年からは『寛永諸家系図伝』の編纂に向けた修史事業が開始される。これ

以降、近世島津家は源姓(清和源氏。源頼朝の末裔)を公称としていく。鈴木彰「再編される十六世紀の戦場体験——島津氏由緒との関係から——」(文学) 隔月刊13 | 5 二〇一・二・九) 参照。

(9) 注1藤田論文が、『善隣国宝記』が存在したことには注目している。

(10) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期 改訂新版』(一九九一・三 明治書院)。

(11) 松尾千歳「資料紹介——鹿児島二召置御書物並富隈へ被召上御書物覚帳」(尚古集成館紀要) 3 一九八九・三三)、注7拙稿参照。

(12) 鹿児島県・鹿児島県歴史資料センター黎明館編『祈りのかたち〜中世南九州の仏と神〜』(黎明館企画特別展図録 二〇〇六・九 「祈りのかたち」実行委員会) 収載。

(13) もちろん、「三国伝来記」『月蓋長者』は「善光寺縁起」ともかわらう。なお、数種の仏舍利関係の品々も、広く釈迦への関心と信仰にかかわる存在として注目される。ただし、王権とかかわる舍利信仰という側面での意義も無視できまい。

(14) この点は別稿で論じる予定である。

(15) とくに小峯和明が「東アジアの仏伝文学・ブツダの物語と絵画を読む——日本の『釈迦の本地』と中国の『釈氏源流』を中心に」(論叢 国語教育学) 復刊3 二〇一二・七)を含む一連の論稿によって、(仏伝文学) 研究を推し進めている。

(16) 注4 栗林論文は、『三国名勝図会』に基づき、「当麻曼荼羅」が天正十三年（一五八五）の豊臣秀吉による根來寺攻撃の兵火を避けるためにもたらされたものとしている。

(17) 塩出貴美子「十巻本「高野大師行状図画」の写本について——延暦寺本を中心に——」（『文化財学報』12 一九九四・三）、鹿島蘭「弘法大師伝絵」十巻本について」（『MUSEUM』514 一九九四・一）等参照。十巻本諸本は最も流布した伝本群で、高野山と関係する作例が多いとされる。

(18) 前述した海濁での滞在中、信輔は天神社に詣でている（『三藐院記』文禄三年五月十一、十二日条）。また、北野天満宮によく詣でたこと、自画賛のなかでは圧倒的に渡唐天神が多いことが、前田多美子『三藐院近衛信尹』（二〇〇六・四 思文閣出版）によって指摘されている。

(19) 延慶本・長門本など、敦盛の所持品を筆築とする諸本もある。

(20) 鈴木彰「まさなうも敵にうしろをみせさせ給ふものかな」——詐術としての熊谷直実の言葉——（『歴史と民俗』28 二〇一一・二）でこうした傾向について論じた。

(21) 『経蔵記』にみえる「父母恩重経 一卷」の意義については、金英順「近世初期の『父母恩重経』注釈書について——女貞著作『仏説父母恩重経鼓吹』を中心に——」（『立教大学日本文学』111 二〇一四・一）に言及されている。

### \*引用テキスト

『一乗院経蔵記 全』……島津家文書マイクロフィルム。「当山

宝物案内記 上下」……『坊津町郷土誌 上巻』（一九六九・十二）。併せて鹿兒島県立図書館蔵本も参照した。『三藐院記』……史料纂集。『平家物語』覚一本……岩波旧大系。

【付記】本稿は、二〇一三年七月六日に行われた立教大学日本文学会大会での講演の一部をまとめたものである。また、そのものとなる構想は、二〇一三年三月二十八日に今昔の会春合宿で発表した。関係各位に御礼申し上げる。

本稿は二〇一三年度科学研究費助成事業基盤研究（C）（課題番号25370236）による研究成果の一部である。

（すずきあきら 本学教授）